

創学舎ニュース

No.283

すごいレベルを 見せられた!!

先日チャンピオンズリーグの決勝が行われた。その時の感想を少し……。

ちなみに、チャンピオンズリーグと聞いてピンとこない人のために解説。チャンピオンズリーグとはサッカーの大会で、ヨーロッパの各国のリーグ(日本で言うJリーグ)の上位チームによる大会である。各国の優勝チームが集まり戦つたということを考えただけでもレベルの高い大会であることが想像できるだろう。

さて話を元に戻し、決勝はクリスティアーノ・ロナルド率いる前回優勝のマンチェスター・ユナイテッド対リオネル・メッシ率いるバルセロナだ。ちなみにこの二人は世界最高のプレイヤーとして知られている。試合は大観衆の見守るなか、緊張と興奮が入り混じりながら始まった。そして……結果は二対〇でバルセロナが優勝した。



この試合を見て感じたこと。それは基礎は大事であるということ。バルセロナは細かいパスをつないでリズムを作っていく。正確にパスを出し、それをしっかりトラップする。そのあと走る。それらを高レベルでやってのける。誰もが練習する内容を徹底させて優勝までできたのだ。

それがよく表れていた試合だった。

考えてみると様々なスポーツにおいて、基礎練は必ず存在し、また徹底的に行われる。スポーツだけでなくピアノなどの楽器などでも同じであろう。たぶんみんなも部活動などで基礎練はやっていると思う。なぜやっているのか。コーチに言われたからかもしれないが、この世界でも基礎練はとても大事なのだ。

そこで学習に目を向けてみると、基礎練はやっているだろうか?これが基礎練だと意識して基礎練をやっている人は少ないと思う。実は小学校の頃の計算ドリルや漢字ドリル、毎日の教科書音読などがまさに基礎練だったのだ。これを徹底してやった人はあとで大きく伸びる。では、中学校での基礎練はといえば、これが行われていないのだ。

そこで、創学舎では、普段意識しないとなかなかできない基礎練の部分を宿題としてみんなに出している。英文にしる漢字にしる基礎練なのだ。毎日コツコツやらないと力にならない。入試や模試の前だけにやってても効果はないのだ。試合前日だけ練習しても試合に勝てないのと同じだ。

基礎練は面白くないのが普通だ。もちろん面白くない基礎練を楽しくする工夫も必要だろう。しかし基礎練をしっかりと続け、試合などで勝てるようになってくると楽しくなるものである。学習においてももしっかり基礎を繰り返し徹底することで、テストで点が取れるようになってくる。毎日の基礎練をおろそかにしてはいないかい? (松永)

変わるとき ②

みなさんは、今までに仲良くしている友達と真剣勝負をしたことがあるだろうか。普通ならば、あまりしたくないことで、私もできればしたくなかった。しかし、ちょっとした後押しがあり、勝負することになってしまった。

私の友人であるD君とは、幼稚園に入る前から仲が良かった。小学校に入ると、興味を持つものが違うことから、しばらく遊ぶことがなくなっていた。小五ときにM君(変わるとき参照)のこともあり、私が音楽部に入ったことをきっかけにまたよく遊ぶようになった。

D君は、音楽が好きでスポーツは観戦のみ好きというタイプで、常に全体を見渡しながら行動していく人だった。周りの信頼も厚く、小六の時は児童会長もしていた。

中学校へ入学すると、私はバスケットボール部、D君は吹奏楽部へ入部し、二人とも生徒会へ入ることとなった。私は、生徒会がどんなことをしているかよく分からず、ただ単にD君に誘われたのでやってみようという気持ちだった。そこで一年が過ぎ、中一の生徒会選出の時期になった。私は副会長へ立候補して、D君と一緒にやっていくつもりだった。しかし、自分の気持ちとは別にクラスでは、「D君を会長にさせないでおまえがなれ。」と言われた。前会長でバスケットボール部のキャプテンだった先輩からは、「バスケット部のキャプテンもおまえがやるんだから、会長も引き継いでがんばってほしい。」と言われ、私はその言葉で会長に立候補する決心がついた。

会長に立候補したのは、私とD君の二人だけだった。そこから選挙がはじまった。私にはクラスや他の運動部の強力な後押しがあり、順調な選挙活動で投票日をむかえた。その日は土曜日で結果がよくわからないまま帰宅した。日曜日に一本電話がかかってきた。D君からだった。「選挙の結果知っている? 200票以上の差で前の勝ちだったさ。今回、俺は負けただけで書記か何か担当させてもらえるならやらせてくれなにか。精一杯サポートするよ。」と言われた。

D君に書記をお願いした。私はここから、D君が小学校で児童会長をして感じてきた責任の重さを痛いほど感じるようになる。実のところ、生徒会の役割とは、行事を企画したりすることくらいだと思っていた。中一でも生徒会に参加していたが、そのときにイメージしていた生徒会の役割は、ほんの一握りにすぎなかったのだ。ある。

さらに、二人いた副会長は、両方とも内申書を良くするためだけに立候補していたので、塾に行くなどと言って全く仕事をしないのだ。D君に帰り道で、「副会長は意味ない存在だ。どうしようか。」と話す。一人でやりきる覚悟がないなら、会長に立候補したらだめだよ。どれだけ真剣に考えて俺が立候補したか、考えてみてよ。」と言われた。普段は冷静なD君が、声を荒げて立ち去って行った。そのとき、はじめて自分の甘さを痛感し、D君の熱い思いも知った。私は、クラスや部活の先輩・友人たちに信頼さ

れているのが嬉しくて、選挙活動を楽しんだだけで、会長になった後のことを真剣に考えていなかったのだから。

D君のその一言のおかげで、私は生徒会の仕事を軽く考えていたことを反省し、それまで以上に積極的に行動するようになった。D君の心強いサポートを受けながら、自分の力を発揮して心に残るような行事作りができ、他の生徒会の仕事をこなすこともできた。このことで自分に自信が持てるようにもなっていた。

そして、お互いまた別々の高校で生徒会に入り、中学での経験を生かすことができた。D君とは、今でも連絡を取り合っていて、楽しい時間を過ごせる友達の一入だ。

D君が私と真剣に向き合って言ってくれた一言のおかげで、私は信頼してくれている人の期待に応えることの意味を理解することができた。みなさんにも一生に一人でもよいので、自分のことを真剣に考えてアドバイスしてくれる友達を作ってほしい。その真剣なアドバイスは、とても重く、言っている人もかなり勇気がいるし、聞いている人もその場では傷つくかもしれない。しかし、本当に自分のことを思ってくくれる人とならば、絆は揺るぐことなくいつまでも友達でいられるはずである。(小林(英))

あなたの夢は何ですか？

「あなたの夢は何ですか？」誰しもが一度は聞かれたことがある質問である。夢を持つ「

とは素敵だ。夢を持つことで人生が充実したもになる。だから、人は夢を持って生きるべきだ、という意図を込めて質問するのだと思う。

たしかに、「夢」という言葉には不思議な魅力が宿っている。しかし、私はあることがきっかけで、「夢」に対する考え方が変わった。

以前あるテレビ番組で、世界に誇る日本の工―スこと松坂大輔選手に取材をしていたのを見る機会があった。その中で、インタビュアーが「将来プロ野球選手になることを夢見ている子供たちに、メッセージをお願いします。」と求めたところ、松坂選手は「夢はすぐさま目標に置き換えなければならないと思います。夢のままだったら、そのうちにあきらめてしまいますからな。」と答えていた。

私は、この言葉を聞いてはっとした。たしかに、「夢」というのはそれが叶わなかったとしても、あきらめがついてしまつ。なぜなら、漠然としていて具体性がないからだ。そして、個人の中で単なる希望・願望として認識され、処理されてしまうからだ。「叶ったらいいなあ。」といったように、では、「目標」はどうだろう。これは、あることを達成するために設定するものだ。最終的なゴールを設定し、ゴールまでの道筋、つまり、過程をどうするかを考えていく。そして、実際にアクションを起こす。「夢」とは異なり、「目標」には具体性がある。だからこそ、それを成し遂げようとする人は自発的に動けるのではないだろうか。



あのイチロー選手も、小学生の頃からすでに

この考え方を持っていた。彼の小学校の卒業文集には次のような記述が見られる。「僕のゆめは、一流のプロ野球選手になることです。そのため、中学・高校で全国大会に出て活やくしなければなりません。「一流のプロになるというゴールがあり、ゴールへの道筋が書



かれています。さらに、「小学校一、二年生までは半年くらい、三年生からは三六五日夜三六〇日はげしい練習をします。だから、友だちと遊ぶ時間は、週に五、六時間くらいしかありません。」とある。ここでは、目標達成のための具体的な手段を述べている。イチロー選手は「ゆめ」という言葉を使っているが、これは「目標」と同義である。

どうだろう。普通の人が見たら異常だと思ふかもしれない。しかし、これこそ人間のすごいところである。「夢」を「目標」に置き換えることで、こんなにも人間は動けるのだ。だから、私は「夢」という字面どおりの抽象的な意味では、この言葉を使わないようにしている。私にとって「夢」とは、「目標」として意識しているものことなのだ。

最後に、「ここまで読んでもらったあなたに今一度聞きたい。「あなたの夢は何ですか？」と。(栗原)

脳が溶ける？ (6)

大半の人にとって勉強は面白くない。これは、実は「仕事」と似た部分である。勿論、「仕事」は勉強と違って個人的な行為では済まないし、

その成否は自分の家族はいつまでもなく、共に働く人、その家族、その組織、企業規模によっては、その地域の経済にまで関わってくるもので、「働く人」の責任は大きい。それでもあえて「勉強」と「仕事」を並べてみたのは次のような事情からである。

「仕事」をする上で、必要な力は多岐にわたる。基礎的な知識やスキル、人間関係調整力、交渉力、企画力。地位が上がるにつれて、その種類も増え、深さも増す。そして、こうした諸能力は、就職してはじめて開発されるものかといえはそうではない。ある程度のレベルまで就職する前に養っておかなければならないのである。きみ達が、自分と深い関りがある人達以外に無関心なのと同様に、社会もきみに対して無関心なのだから、就職にあたってこうした諸能力をある程度磨いていない人は、当然のことながら大きなハンディを負うことになる。

さて、前号で、勉強をやっていくなかで無意識のうちに養われるものがあると書いたが、これは仕事をする上での基礎的なスキルというより、その前提となる基礎中の基礎「根本能力」というものである。(以下次号) (小林(健))

▲ 継続希望の方へ ▲

卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。

新星堂他全国書店にて

好評発売中!!

愛の壁

- お父さんお母さん

あなたの愛は子供に届いていますか

著者：小林 恵右

2006年5月1日発行(1,500円)